

大高相模守康澄、男鹿城へ参る事

これはさておき、相模守康澄は切山の城責め落とされ、無念ながらも男鹿をさして急ぎける所に、隠れ居たる兵ども、我先と馳せ集まる人々には、扇田伊藤の一族・工藤・小林・鶴沼・矢坂・飯塚・鶴形・寺内・小玉・小沢・牛沢・飛根・山内・床岩・飯坂・佐藤・村上・井上・門間、かれこれ都合四百騎ばかり馳せ参る。城にもなれば、御前に畏かしこみて言上す。

さても湊九郎殿より討手として三浦兵庫守大将にて、采女正、玄蕃亮大勢にて押し寄せ既に一戦に及び候、かねて存じざる儀の事ゆえ、味方数多おほく討死候、ひとえに無念に存じるなり、よんどころなくこれまで逃げ参り候、願わくはこの度、九郎殿討手に某仰せ付けられ下され候わば、有難き仕合せに存じ奉り候、と謹みて畏る。

愛季公、聞こし召され、汝が申す所至極なり、さらば汝、馳せ向かい、愛吉反逆の輩追放仕るべしと頓とがて加勢を下されける。先、山田の一族三百余人、田中の一族五百余人、下莉の一族二百余人、大平の一族、小貫の一族、相模が手勢四百余人、都合その勢二千余騎、中黒の大旗さし上げ湊をさして押し寄する。かの康澄が威勢のほど恐れぬ者はなかりけり。

愛季公、石岡・小野寺・加賀・松田を御前に召され仰せ出でられけるようは、松田・小野寺兩人は罷り向かつて後詰めを仕り候え、と五百余人下されける。畏まって御請けを申し、御前を罷り立ち、さてまた湊修理・北条主馬・片岡伝内左衛門尉に四百余人下され、相模守が加勢仕るべし、と仰せ下されける。畏みて私宅に帰りその用意仕り、やがて湊へ急ぎける。大旗風に翻ひるがえし、天は馬の轡ひづめの響き、地は駒の蹄ひづめのさんざめくありさまは、目を驚かすばかりなり。

湊九郎愛吉公 御出馬の事

さるほどに九郎愛吉公、寄手軍兵打ち負け無念のほどは類なし。ややあつて愛吉公、何とか思し召されけん、この度は直ちに発向すべきなり、その用意仕れ、畏み候と、先、八柳長門守・仙北戸澤能登守・新庄石見守・松田・見国・桂川・岩見・山内・大川・橋本・三牧・藤倉・中嶋・安田、その勢二千五百余騎、御家の老衆、後藤兵部之丞・大井将監・大久保藏人之助・後藤采女正を先としてその勢雲霞の如く控えたり。

大将九郎殿御装束、華やかに出で立ち給い、肌に何をか召されけん、唐綾からあやの直垂ひたたれに紫糸の御着背きせ長なが、同色の甲、龍頭に鍔形くわがた打ちたるを、猪頸いぐいに着け、軍配うちまわ団扇うちあを持たせ給い、はや打ち立て者ども、とやがて御馬にゆらりと召し真先にぞ出で給う。先陣後陣行列し大旗風に翻えし、おして男鹿へぞ下らるる。